

# 憧れのシベリア鉄道と黒い太陽

山村 浩太郎

まさか自分がシベリア、しかもまだ春を迎える前の凍てつく大地に立つ、などということ想像したことがあるだろうか？。

極寒の地といえば5年前にアラスカにオーロラを見に行っていたことがある。しかし、同じ極寒の地と言っても観光ツアーの盛んなアラスカとは話が違ふ。そこは政情不安なロシアのど真ん中、「チタ」という今まで聞いたことも無いような町である。ツアーの案内が届いてからもなかなか決断はできなかった。しかし、パソコン通信で、参加される方の発言がちらほらと増えてくるとともに、一年前、タイで見たコロナが徐々に頭の中でよみがえり、いつの間にか心はシベリアへ。正月明け、定員で締め切り直前の誠報社・東急観光のDコースに申し込むことになった。

シベリア、と聞いて真っ先に思いつくのはシベリア鉄道である。「シベリア鉄道」という響きに何となく微かな憧れを抱いていたのは、今回ツアーに参加されたかたに共通していたように思う。観測場所はそんなシベリア鉄道の操車場を見下ろす、チタ郊外の丘の上であった。

日蝕当日早朝、「決死隊」と名付けられたヘール・ポップ彗星目当ての3時出発組は、ホテルから20分ほどの観測地に到着。天気は快晴、気温は-25度。ヘール・ポップ彗星は東の空に大きなV字の姿を見せていた。各々バスから離れさっそく彗星の撮影に入る。自分も重い思いをして日本から持ち込んだ赤道儀一式を組立始めるが、低温と着込んだ防寒具のせいで思うようにいかない。何とか準備ができ極軸を合わせようとするが、高緯度のため北極星が高く、極軸望遠鏡が上手く覗けない。結局撮影に入るまでに約1時間を要してしまい、すでにまわりにはシャッターを切る音が響いていた。

しばらく順調に撮影を続けていると、遠くからのかなり強烈な光が目には入った。初めは何かわからなかったが、シベリア鉄道の機関車のヘッドライトの光であった。ちょうど線路の直線部分の延長線に陣取ったようで、その後も何度もこの光を浴びた。さらに夜明け近くなると貨車のきしむ音、機関車の汽笛の音が響き、本当にシベリアに来てしまったんだ、そんな感動に浸りながらシャッターを押し続けた。気温がさらに下がり、足の指先が少し痛くなってはきたが、心配した機材は低温下でも問題なく動き、皆既まで順調にいくと疑ってやまなかった。まさかこの後雲が広がるとまったく思わなかった。

雲間を透して太陽が昇った。直前には太陽柱と呼ばれる現象が見られたが、上空の水蒸気が凍って起きる現象で、珍しい現象ではあるが今は喜ばない。日蝕はもうすぐ始まるのだ。7時出発の組が合流するが何となく気持ちが重い。もしかしてダメか、そんな思いで望遠鏡の横に立っていたが、皆既中に三角撮影をするのは眺めが今一つの位置であることにふと気付く。しばらく観測地を歩き回ると、少し丘を下った場所に街を一望できる絶好のポイントを見つけた。曇ってはいるがもうすぐ第一接触の時間だ。しかもあれだけ苦労して極軸を合わせたのだ。これから動か

すべきかかなり迷ったが、シベリア鉄道の操車場が見え、あの緑色の客車が目には入る。やっぱりシベリアに来たんだ。それが実感できる場所で皆既日蝕が見たい。準備万端の人々の間を、望遠鏡を担ぎ移動を開始した。

極軸はコンパスと水準器で大まかに合わせた。すでに欠け始めていたが準備で太陽を見る余裕はない。ほぼ用意ができて空を見ると、いつの間にか雲は薄くなり、太陽はかなり欠けていた。これで大丈夫、まわりの仲間の顔もすいぶんなごやかになっていた。

皆既5分前、雲の心配はもう無い。あらかじめ決めておいたタイムスケジュールどおり、構図、絞り、ピント、シャッタースピードを確認し撮影体制に入る。あとはレントゲンフィルムで造ったフィルターを直前に指で弾き落とすだけだ。FC-50で直焦点撮影、広角で皆既中の空、赤道儀に同架したファミスコで眼視。前回のタイより長いとはいえ、かなり落ちついて操作しないとまらない。しかし、背中がゾワゾワしてしかたない。

フィルターを透した太陽がかなり細くなる。しかし焦って早くフィルターをはずしてはいけない。タイで失敗している。眩しい光が目には焼き付いてしまうのだ。直前まで我慢してフィルターをはずす。第2接触直前だ。月の縁から漏れた太陽の最後のきらめきが何とも美しい。シャッターを切り始めるが手が震えてしかたない。

一粒のダイヤを残し黒い太陽がシベリアの空に現れた。コロナの広がりあまり大きくなく、黒い太陽を包むような感じである。シャッタースピードを徐々に長くしていくとともに少し気持ちが落ち着いてきた。次は横に置いたカメラでの写真だ。望遠鏡を覗いていた目はずし肉眼で直接空を見る。これ程まで美しい光景はあるだろうか。眩しいほどの金星と、ちょっと控えめの水星がそばに見える。直前に場所を移動したのは正解であった。そういえばヘール・ボップ彗星はどうだろう。天頂付近を見るが雲があってわからない。探している時間はない。太陽のある場所以外はかなり雲があったのだ。一通り写真を撮り終わり、あとは第3接触までじっくり肉眼で堪能しよう。

第3接触はあっというまに来了。月の縁からあふれ出した光が第2接触にも増して美しい。下手な形容詞は要らない。ただただ美しい。こればかりは実際に見た人でないと理解出来ないであろう。

ついに空に光が戻った。全身の力が抜け、声も出ず大地に横たわった。それが自分にとって2回目の日蝕体験の終わりであった。しばらくすると太陽は雲に隠れてしまった。運が良かったとしかいいようがない。あとでビデオを見たが皆既中も結構薄雲がかかっていたようだ。日食天気階級表の評価でいうと、何とか3というところだった。

日蝕はいつも想像出来ないような場所に私達を連れていってくれる。前はタイの地方都市。バンコクの繁栄とその陰の地方現実。そして今回のシベリア。決して豊かとは言えない生活の中でも一生懸命生きている人たちがいる。ただの観光旅行では感じる事の出来ないことを経験させてくれる日蝕ツアーは、日蝕を見るということを除いても価値のあるものだろう。

さて次回は…。